

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K03103

研究課題名(和文) 非行少年のいじめ被害経験が心理特性と非行性に及ぼす影響 - 援助者の有無に注目して

研究課題名(英文) Influence of bullying experience of juvenile delinquents on psychological characteristics and delinquency: focusing on the helpers.

研究代表者

堀尾 良弘 (Horio, Yoshihiro)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：40326129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：非行少年が厳しい家庭環境・生育環境に置かれていることは、従来から指摘されてきたとおりである。本研究では、被虐待経験を含めて、いじめ被害、犯罪被害などの被害経験を受けている非行少年に注目した。被害経験を受けた際に、非行少年は一般青年に比して周囲の人に援助を求めない傾向が明らかとなった。しかしながら、非行少年の更生のためには周囲の援助者が必要であり、援助者の果たす役割は大きいと言えよう。そこで、援助者の果たす役割と援助時の留意点について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、非行少年の加害性のみならず、被害経験を多く持つ非行少年の被害性に注目したことに学術的意義がある。しかも、非行少年が被害を経験した際や立ち直り・更生に向かう際に重要な役割を果たす周囲の援助者が、どのように非行少年に手を差し伸べればよいのか、援助者の役割について明らかにした。このように、非行少年の更生や援助のあり方について、学術的な知見を明らかにしたことは、同時に援助者にとってその役割や援助の留意点を明示することになり、社会的な意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：The author has pointed out that juvenile delinquents are placed in a harsh family and growing environment. In this study, I focused on juvenile delinquents who have experienced victimization such as bullying and crime, including abuse. Juvenile delinquents tended not to seek help from helpers around them when they experienced victimization, compared to general youths. However, for the rehabilitation of juvenile delinquents, helpers around them are necessary, and the role played by the helpers is important. Therefore, I clarified the roles played by the helpers and the points to keep in mind when providing assistance.

研究分野：犯罪心理学、非行臨床心理学

キーワード：非行少年

1. 研究開始当初の背景

厳しい家庭環境や生育環境に置かれている非行少年がいることは従来から非行臨床の実務家の間では多く指摘されてきた。少年司法における家庭裁判所調査官の調査や、少年鑑別所における心理技官による資質鑑別はもとより、重大事件を起こした際に実施される精神鑑定あるいは犯罪心理鑑定等により、事例分析を通じて多くの非行少年・犯罪少年が様々な被害経験を含む劣悪な家庭環境・生育環境にあることは実践現場においては知られていた。また、犯罪心理学研究あるいは非行臨床心理学の分野においても、いわゆる事例研究によって、これらの問題はしばしば指摘されてきた。

しかしながら、非行少年の被害経験の問題について、データ・エビデンスによる実証的な研究としては、当初、とりわけ被虐待経験に関しては注目していたものの、被虐待経験以外に、例えばいじめ被害や犯罪被害など様々な多重の被害経験については、データによる実証的研究が十分なされなかった。さらに、非行少年の立ち直り・更生にあたって、重要な役割を果たすべき援助者の関わりについての研究は不十分であった。

これらの背景から、非行少年の被害経験に注目し、とりわけ、非行少年の立ち直り・更生に際して周囲の援助者の果たす役割は何なのか、援助の際にどのような留意点が必要なのかを明らかにすることは、非行少年の立ち直り・更生にとっても、援助者の援助のあり方にとっても、重要な意義があるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、非行少年の被害経験に注目した上で、被害を受けた際に周囲の援助者との関係について着目した研究である。

非行少年の立ち直りを援助する活動は様々な所で行われている。公的機関としては、警察、家庭裁判所、少年鑑別所、少年院、保護観察所などがあり、その他にはNPO、民間団体など多くの人が関わっている。このような組織・団体だけではなく、実際には、家族、友人、学校、職場など周囲の関係者が非行少年の立ち直りに援助の手を差し伸べようとしている。しかし、援助を自ら求めない非行少年も数多く存在すると推測される。

非行少年は自らの加害行為だけでなく被害経験も多く受けているが、被害に遭った際に周囲に援助を求められるのか、また、求められないとすれば何故なのかを明らかにすることは重要である。

そこで、本研究は、非行少年が過去に被害に遭った際の援助要請行動の実態を調査し、一般青年と比較した上で、援助要請行動がなされない場合の理由とその背景を明らかにした。そして、援助者が考慮すべき役割について示した。

3. 研究の方法

過去に非行歴のある少年（非行少年）と非行歴のない一般青年に対して、それぞれ次のような質問紙調査を行った。

- (1) 調査対象者 13歳から20歳までの男女その他、計492人
(男子252人、女子236人、その他4人)。

これらの調査対象者について、下記の特徴に則して分類し2群に構成した。

- ① 非行群（警察に検挙あるいは家庭裁判所に係属した経験のある人）
13歳から20歳までの男女その他212人（有効回答数211人）。
② 一般群（警察検挙・家庭裁判所係属歴のない高校生・大学生）
16歳から20歳までの男女その他280人（有効回答数277人）。

(2) 調査項目

- ① 被害経験
犯罪被害、いじめられ経験の有無、頻度。
② 被害経験時の感情の程度
恐怖、無力感、自己嫌悪、怒りの程度。
③ 被害時の援助要請の有無、援助の対象。
④ 援助要請しなかった場合の理由。
⑤ 無気力尺度

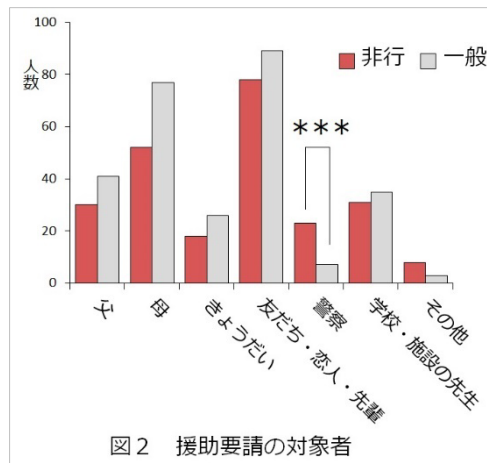
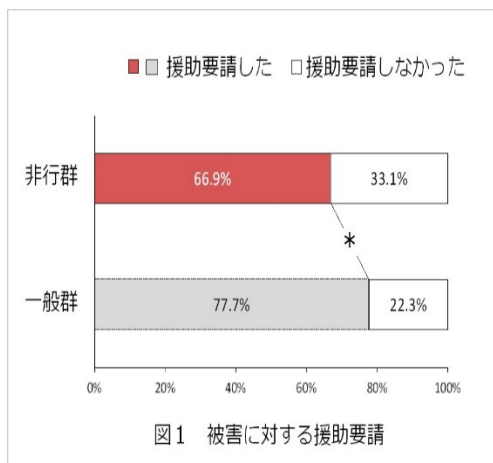
厭世観、失敗不安、自信喪失の3因子構造からなる30項目。

なお、本調査にあたっては、研究協力者の所属先の承諾を得て、個人情報保護法及び日本犯罪心理学会倫理綱領に準拠して実施した。調査時には調査対象者本人に対して、調査は無記名、回答は任意であることを説明し、回答の際は協力できる旨の意思表示を調査票に記入することによって本人の承諾を確認し、実施した。

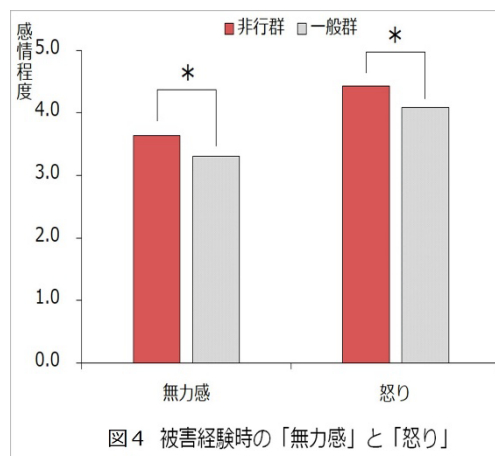
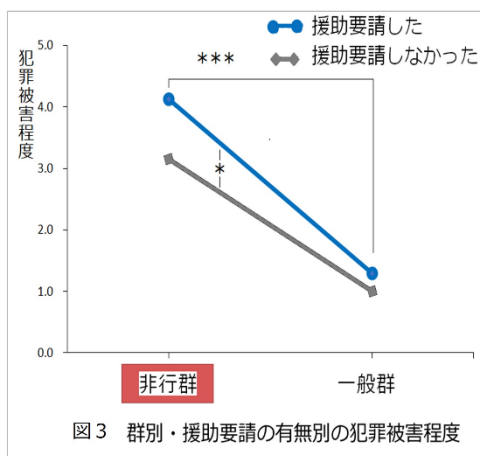
4. 研究成果

- (1) いじめ・犯罪被害経験のある人の中で、被害に対して援助要請をした割合は非行群66.9%、

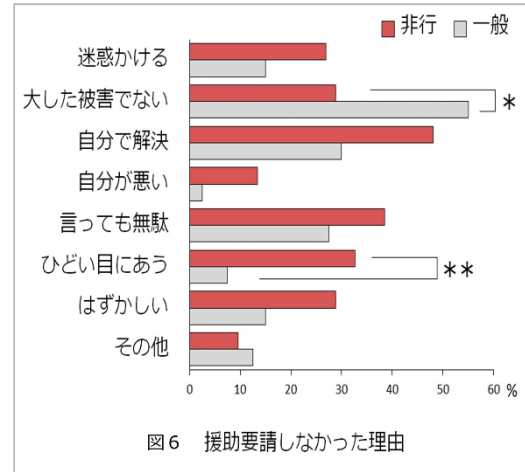
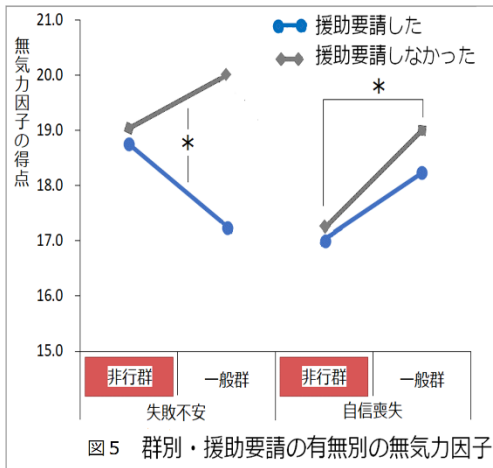
一般群 77.7%と非行群の方が有意に低かった ($\chi^2(1)=4.68, p<.05$) (図 1)。また、援助要請をした対象者は、非行群・一般群ともに、多い順に友だち・恋人・先輩、母、父、学校・施設の先生、きょうだい、警察、その他であった。警察に対しては、非行群の方が一般群より有意に多かった ($\chi^2(1)=15.06, p<.001$) (図 2)。



- (2) 犯罪被害の程度を数値化して犯罪被害程度項目の合計点を求め、それを従属変数とし、非行群・一般群別、援助要請の有無別の2要因分散分析を実施した結果、群別と要請有無別にそれぞれ主効果が見られた ($F(1, 309)=78.56, p<.001; F(1, 309)=5.11, p<.05$)。すなわち、非行群 ($M=3.81, SD=2.69$) の方が一般群 ($M=1.23, SD=1.57$) より犯罪被害程度が有意に高く ($p<.001$)、なおかつ、援助要請をした人 ($M=2.62, SD=2.60$) の方がしなかった人 ($M=2.31, SD=2.44$) よりも犯罪被害程度が有意に高かった ($p<.05$) (図 3)。
- (3) いじめ・犯罪被害経験時に感じた感情は「無力感」と「怒り」に、非行群・一般群間の主効果が認められ、被害経験時の感情は「無力感」と「怒り」に、非行群 ($M=3.63, SD=1.39; M=4.43, SD=.96$) の方が一般群 ($M=3.30, SD=1.23; M=4.08, SD=1.05$) より有意に高かった ($F(1, 309)=4.55, p<.05; F(1, 311)=4.85, p<.05$) (図 4)。



- (4) 無気力尺度の「失敗不安」因子は、援助要請の有無に主効果があり、援助要請しなかった人 ($M=19.30, SD=4.52$) の方が要請した人 ($M=18.06, SD=4.36$) より「失敗不安」が有意に高かった ($F(1, 274)=5.39, p<.05$)。また、「自信喪失」因子は、援助要請の有無にかかわらず、一般群 ($M=18.37, SD=4.03$) の方が非行群 ($M=17.10, SD=4.46$) より高かった ($F(1, 272)=5.35, p<.05$) (図 5)。
- (5) 援助要請しなかった理由は、図 6 に示すとおりで、とりわけ「大した被害ではなかったから」は一般群の割合が有意に高く ($\chi^2(1)=6.43, p<.05$)、「言うとかえってひどい目にあうと思ったから」は非行群の割合が有意に高かった ($\chi^2(1)=8.43, p<.01$) (図 6)。



- (6) 総じて、非行群の方が被害程度は高いにもかかわらず援助要請は少ないが、被害が大きい場合に警察に話すのは、警察との関係が近いためと見られる。非行群は無気力や怒りを感じやすく、特に援助要請しない人は「失敗不安」を感じながらも、あたかも仮想的有能感を抱いている様子がうかがえる。「大した被害でない」と思う非行少年は相対的に少なく、実際に被害は大きいのが、援助を求めると「更にひどい目にあう」という不安を抱えている。学校・施設等の関係者には父親と同程度に援助を求めており、非行少年の無気力、怒り、不安を理解して、被害の拡大防止の観点を持った援助が重要と言えよう。このように、被害を受けた非行少年が、周囲の援助者に援助を求めた際に、非行少年の心情、特性を理解した上で、援助活動をしていくことが重要であることが示された。それが、非行少年の今後の立ち直り・更生への手掛かりになるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoshihiro HORIO
2. 発表標題 Influences of Victimization Experiences on Young Offenders
3. 学会等名 The 32nd International Congress of Psychology (ICP2020+), Prague CZECH REPUBLIC (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshihiro HORIO
2. 発表標題 "Experiences of Victimization among Young Offenders "
3. 学会等名 20th International Conference on Psychology and Health (ICPH 2018), London (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀尾良弘
2. 発表標題 非行歴を有する少年の被害経験と援助者の役割
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第60回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 白井利明, 加藤弘通, 堀尾良弘, 若松養亮, 間宮正幸, 神谷哲司, 山口智子, 上山真知子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 112
3. 書名 生涯発達理論と支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

稲嶋修一郎・久保菜結子・岩田茉美・堀尾良弘 共著, 「幼児期および小・中・高等学校記における習慣的な運動経験が青年・成人期のストレス・コーピング・スキルに及ぼす影響」人間発達学研究, (14), 1-10, 2023年.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------